「にんじん」の訳稿を終へて

岸田國士

青空文庫

（此の一文は考ふるところあつて特に挟込となす）

この翻訳は全く自分の道楽にやつた仕事だと云つていゝ。初めはのろのろ、しまいには大速力で、足かけ五年かゝつた。創作月刊、文芸春秋、作品、新科学的文芸、詩・現実、新青年、改造等の諸雑誌に少しづゝ発表した。

最初に断つておきたいことは、この小説を作者自身が脚色して同じ題の戯曲にした、それを、畏友山田珠樹君がもう七八年前、「赤毛」といふ題で翻訳をし、これが相当評判になつて、今日ルナアルの「ポアル・ド・キャロツト」は「赤毛」といふ訳名で通つてゐるかも知れないことだ。僕は、「赤毛」といふ題も結構であると思ふが、元来訳しにくい原名であるから、山田君の「赤毛」は山田君の専売にしておいた方がよいと思ひ、故ら異を樹てる意味でなく、自分は自分の流儀に訳してみたまでゞある。原名を直訳すれば「人参色の毛」である。

初版の刊行は千八百九十四年、作者三十一歳の時である。

この小説を書き出したのは千八百九十年で、一章づゝ次ぎ次ぎに雑誌や新聞へのせた。また、ある部分は、他の形式で本にしたこともある。初版には「壺」「パンのかけら」「髪の毛」「自分の意見」「書簡」等の項目はまだ加はつてゐない。従つて、千八百九十七年版以後のものが、現在の完成した形である。

戯曲としては、千九百年三月、アントワアヌ座でこれを上演した。
映画になつたのは無論ずつと後のことだが、最近デュヴィヴィエの監督で発声映画になり、この秋日本でも封切される筈だ。
「にんじん」が作者自身の肖像であることは、作者の日記を見ればわかる。
日記の中で、彼は、この作品に少しばかり顰め面を見せてゐる。ルピツク夫人の老い朽ちる有様を眼のあたり見る「にんじん」四十歳の心境であらう。
ルナアルは、この書を、その二人の子供、息子フアンテツクと娘バイイ（共に愛称）とに献げてゐる。訳者も亦、この訳書を自分の二人の娘に贈りたく思ふ。

昭和八年七月

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集28」岩波書店
　　1992（平成4）年6月17日発行
底本の親本：「にんじん　挟み込み別紙」白水社
　　1933（昭和8）年8月1日発行
初出：「にんじん　挟み込み別紙」白水社
　　1933（昭和8）年8月1日発行
入力：門田裕志
校正：Juki
2011年8月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「にんじん」の訳稿を終へて

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/